

Title	吐魯番出土文物研究会会報 第50号 : 陳國燦先生来日号
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 50 p.1-p.6
Issue Date	1990-12-01
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78860
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

吐魯番出土文物研究会会報

1990年12月1日
吐魯番出土文物研究会

第50号

陳國燦先
生 来 日 号

陳國燦先生の来日

【はじめに】

武漢大学歴史系の教授で、吐魯番出土文書の整理小組のスタッフでもある陳國燦先生が日本学術振興会の招聘で六月末に来日され、九月末までの三か月間主として東京大学東洋文化研究所において研究に従事されました。この間、七月七日（土）には唐代史研究会の大会（於箱根清雲荘）で「近年来中国的唐代史研究与敦煌吐魯番文書研究」と題して、また九月二一日（金）には東洋文化研究所で「吐魯番所出来自唐朝都城的文書」と題して講演をされました（先生は九月二八日に帰国されましたが、その直後敦煌で開かれた1990年敦煌学国際學術討論会では、「唐五代敦煌四出道路考」（一〇月一〇日）という報告をされています）。

吐魯番出土文物研究会の第四回大会が開かれた八月上旬にはちょうど先生も京都に滞在して、毎日龍谷大学で大谷文書を閲覧されていました。そこで龍谷大学の小田義久先生の企画により、大会期間中の八月二日（木）の午前一〇時から龍谷大学文学部棟小会議室において、本研究会の会員との間で座談会が開かれました。そこでここには、陳國燦先生の略歴・主要著作目録とあわせ、座談会の記録を掲載することにしました。

◆座談会の記録

陳國燦先生との座談会では、先生から中国における吐魯番出土文物研究の現段階についてお話を伺い、本研究会からは、荒川正晴が日本国内に現存する吐魯番出土文書について、現状を簡単に紹介しました。以下に、陳先生から伺ったお話を要約しておきたいと思います。なお出席者は陳先生と本研究会の会員のほか、座談会を企画して下さった小田義久先生、通訳の労をとって下さった龍谷大学の北村 高氏、および樓蘭研究会の伊藤敏雄氏（大阪教育大学）の計九名でした。

①『吐魯番出土文書』の出版状況について：

全一〇冊の録文編は既に完成しており、今後の課題は第一に、その図録（写真）を整理して出版することである。これは全四冊の予定で、録文編との対照関係は以下のようになる。

（図録本）

（録文編）

第 一 卷……………第一～三冊

第 二 卷……………第四・五冊

第 三 卷……………第六・七冊

第 四 卷……………第八～一〇冊

またこのほかに、収録された文書の分類目録を作成する予定である。文書の分類は、①籍帳、②契約（租佃契、売買契、雇用契、借貸契）、③軍府文書、④官府文書（牒、狀、関、辞、判）、⑤交易文書、⑥館駅文書、⑦古籍、⑧書札、⑨その他、である。

さらに中国国内に分散している吐魯番出土文書を蒐めて、全三冊からなる『吐魯番出土文書』の

補編本を出す予定である。対象となるのは、以下の機関に所蔵されている文書である（順不同。なおこの点に関しては、吐魯番文書整理小組「『《吐魯番出土文書》整理及研究」項目六五計画期間的執行情況」〈『新疆文物』一九八六年第一期〉、参照）。

- (a) 中国歴史博物館（黄文弼、唐蘭〈いずれも故人〉が解放前後に発掘・蒐集したものを含む）
- (b) 遼寧省博物館
- (c) 甘肅省博物館
- (d) 甘肅省図書館（甘肅省博物館所蔵のものとともに、一九四六年、朝鮮族の画家韓桑然が墓葬を発掘、将来したもの）
- (e) 上海博物館
- (f) 四川省図書館（上海博物館のものとともに、新疆に赴任していた官人が持ち去ったもの）
- (g) 吐魯番地区文管所
- (h) 旅順博物館（大谷探検隊が将来したもの）
- (i) 北京図書館（少数）
- (j) 北京大学図書館（多くの研究者によって蒐集されたもの）
- (k) 新疆維吾爾自治區博物館（一九七六年以後に出土したもの）

②吐魯番における調査・研究活動について

吐魯番には従来から吐魯番地区文管所が設けられていたが、行政・管理面を担当するこの文管所のほかに、新たに発掘調査・研究のための機関として吐魯番市吐魯番学研究所が設置された（副所長は柳洪亮氏、所長は欠）。博物館としての展覧と考古活動を行なう。

また今年五月には、吐魯番学会が成立し、第一次大会が吐魯番市において開催された（本誌第四六号、参照〈ただし侯燦先生からの手紙では、「吐魯番学学会」〉）。その後、第二回大会が一九九二年に予定されていることを伺いました）。

（以上）

◆陳 國 燦 先 生 略 歴

1933年10月24日生。

1958年 武漢大学歴史系中国三至九世紀研究生、畢業。

内蒙古大学歴史系に講師として赴任（1974年まで）。

1975年 武漢大学歴史系に副教授として赴任。

1985年 同教授に昇任。

1986年 湖北省社会科学一等獎を受賞。

現 在 武漢大学歴史系教授のほか、武漢大学中国三至九世紀史研究室副主任、中国敦煌研究院兼任研究員。また中国敦煌吐魯番学会、中国唐史学会、および湖北省中国史学会などの理事。

◆陳 國 燦 先 生 主 要 著 作 目 録

- (1) 「明初航向東西洋の一部海道針經—対《順風相送》の成書年代及其作者の考察—」『史学論文集』第1集 武漢 武漢大学歴史系 1978年 167～177
- (2) 「魏晉間的烏丸と“護烏丸校尉”」『魏晉南北朝隋唐史資料』第1期 1979年 21～26
- (3) 「西夏天慶間典當殘契の復原」『中国史研究』1980年第1期 143～150

- ☆再録：白浜編『西夏史論文集』銀川 寧夏人民出版社 1984年 320～334
- (4) 「唐乾陵石人像及其銜名的研究」『文物集刊』第2集 1980年 189～203
- ☆再録：林幹編『突厥与回鶻史論文選集(1919-1981)』上冊 北京 中華書局 1987年 375～407
- (5) 「跋《武周張懷寂墓志》」『魏晉南北朝隋唐史資料』第2期 1980年 18～22
- ☆再録：『文物』1981年第1期 47～50
- (6) 「論西突厥部族与隋唐王朝的關係」『歷史教学』1981年第7期 44～48
- (7) 「敦煌所出諸借契年代考」『魏晉南北朝隋唐史資料』第4期 1982年 8～16
- ☆再録：『敦煌学輯刊』1984年第1期 1～9
- (8) 「乾陵石人羣」『中国建設』1983年第8期 69～72
- (9) 「唐代的民間借貸－吐魯番・敦煌等地所出唐代借貸契券初探－」武漢大學歷史系魏晉南北朝隋唐史研究室編『敦煌吐魯番文書初探』武漢 武漢大學出版社 1983年 217～274
- (10) 「從吐魯番出土的「質庫帳」看唐代的質庫制度」同上 316～343
- (11) 「對唐西州都督府勘檢天山縣主簿高元禎職田案卷的考察」同上 455～485
- (12) 「吐魯番出土的《諸仏要集經》殘卷与敦煌高僧竺法護的訳經考略」『敦煌学輯刊』創刊号(總第4期) 1983年 6～13
- (13) 「對未刊敦煌借契的考察」『魏晉南北朝隋唐史資料』第5期 1983年 20～26
- (14) 「吐魯番文書在解放前的出土及其研究概況」『中国敦煌吐魯番学会成立大会・一九八三年全国敦煌學術討論會会刊』蘭州 1983年 63～74
- ☆再録：『中国史研究動態』1984年第6期 19～29(未見)
- (15) 「敦煌学吐魯番学簡介」『甘肅日報』1983年8月16日(張廣達氏と共同執筆)
- (16) 「唐瓜沙途程－唐開天“過所”实地考察小記－」『魏晉南北朝隋唐史資料』第6期 1984年 16～23
- (17) 「唐乾陵及其石人群像」『文史知識』1985年第2期 125～128
- (18) 「唐朝吐蕃陷落沙州城的時間問題」『敦煌学輯刊』1985年第1期 1～7
- (19) 「吐魯番出土的東晉(?)写本《晋陽秋》殘卷」文化部文物局古文献研究室編『出土文献研究』北京 文物出版社 1985年 152～158(李徵氏と共同執筆)
- (20) 「敦煌出土粟特文信札的書写地点和時間問題」『魏晉南北朝隋唐史資料』第7期 1985年 10～18
- (21) 「敦煌吐魯番文書与魏晉南北朝隋唐史研究」『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』1986年第1期 2～16
- ☆再録：朱紹侯主編『中国古代史研究入門』鄭州 河南人民出版社 1989年 312～339
- (22) 「武威在歷史上的地位」『紅柳』(甘肅省文芸双月刊)1986年第2期 47～53
- (23) 「八、九世紀間唐朝西州統治權的轉移」『魏晉南北朝隋唐史資料』第8期 1986年 15～19, 25
- (24) 「武周瓜、沙地区的吐谷渾歸朝事迹－對吐魯番墓葬新出敦煌軍事文書的探討－」敦煌文物研究所編『1983年全国敦煌學術討論會文集』文史・遺書編上冊 蘭州 甘肅人民出版社 1987年 1～26
- (25) 「唐代的論氏家族及其源流」『中国史研究』1987年第2期 119～127
- (26) 「魏晉至隋唐河西胡人的聚居与火祿教」『西北民族研究』1988年第1期 198～209, 282
- (27) 「武漢大學陳国燦發言－日本大谷文書与吐魯番新出墓葬文書之關連－」『中国敦煌吐魯番学会研究通訊』1988年第2期 23
- (28) 「對高昌国某寺全年月用帳的計量分析－兼析高昌国的租稅制度－」『魏晉南北朝隋唐史資料』

第9・10期 1988年 4～12

- (29) 「從葬儀看道教“天神”觀在高昌國的流行」同上 13～18, 12
(30) 「從敦煌吐魯番學看傳統文化的時代價值」『武漢大學學報』1989年第4期 73～76
(31) 「唐五代敦煌泉貨里制的演變」『敦煌研究』1989年第3期 39～50, 110
(32) 「韓樂然與新疆藝術考古」『文物天地』1989年第6期 16～18 (侯燦、李徵兩氏と共同執筆)
(33) 「武周時期的勘田檢籍活動－對吐魯番所出兩組敦煌經濟文書的探討－」武漢大學歷史系魏晉南北朝隋唐史研究室編『敦煌吐魯番文書初探』二編 武漢 武漢大學出版社 1990年 370～418
(34) 「吐魯番舊出武周勘檢田籍簿攷」同上 419～439
(35) 「唐五代瓜沙綿義軍軍鎮的演變」同上 555～580
(36) 「略論日本大谷文書與吐魯番新出墓葬文書之關聯」中國敦煌吐魯番學會編『敦煌吐魯番學研究論文集』北京 漢語大詞典出版社 1990年 268～287
(37) 「吐魯番所出唐代都城的文書」(待刊)

【註】

- * このほか、吐魯番出土文書の整理小組のスタッフとして『吐魯番出土文書』の第二冊から第九冊までの編纂に従事されたのはじめ、中国大百科全書・中国史卷《隋唐五代史》の関連項目の執筆と、『敦煌学词典』（未刊）の編纂などにも従事されています。
* なお本目録は、九月二日の講演会の席上で配布された自撰の著作目録中の「本人発表敦煌吐魯番学及有關論文情況」の部分とその後先生ご自身から手紙で教えていただいた情報に、本研究会の責任において一部手を加えたものです。
* 本目録の公表については、東京大学東洋文化研究所の池田温先生からご高配をいただきました。
(以上)

古書展に出品された北館文書について

荒川 正 晴

去る十一月六日(金)より十一月九日(月)にかけて、東京古典会の主催(京都古典会・大阪古典会協賛)による平成二年度の古典籍下見展観大入札会(一六・一七日、下見展観／一八・一九日、入札)が、東京神田の東京古書会館において開催された。出売される古典籍の目録とその多くの図版が、『古典籍下見展観大入札会目録』として事前に同会によって発行されたが、その中に「西域(西州)都督府北館厨牒」(唐・儀鳳二年成 古文書 新疆省(新疆維吾爾自治區)吐魯番(番)出土 長尾雨山¹⁾箱書、〈〉は筆者による補訂)と題される文書断片が載せられた(目録・「中国古写経・刊本・写本類」、七一頁)。幸い鮮明なカラー写真が付載されており(図版、四一頁)、一見して大谷文書・橘文書・中村文書(中村不折氏所蔵(現書道博物館所蔵)文書)中に散在している、所謂北館文書と呼ばれる文書群と一連のものであることが確認できた。

北館文書については、わが国では既に大庭脩・内藤乾吉両氏により検討されており(大庭脩「吐魯番出土 北館文書の研究－中国驛傳制度史上の一資料－」(西域文化研究会編『西域文化研究』第二・敦煌吐魯番社会經濟資料上、法蔵館、一九五九年)、内藤乾吉「西域発見唐代官文書の研究」(西域文化研究会編『西域文化研究』第三・敦煌吐魯番社会經濟資料下、法蔵館、一九六〇年[のち、同氏『中国法制史考證』有斐閣、一九六三年、に再録])、最近では大津透氏が、内藤氏の研究を踏まえて復原・接続作業を進めている(大津透「大谷・吐魯番文書復原二題」(唐代史研究会編『東アジア古文書の史的研究－唐代史研究会報告第七集－』刀水書房、一九九〇年)。今回の古典籍下見展

観大入札会によって、いままで存在さえも知られていなかった新たな北館関係の文書が追加されることになったのである。

筆者は下見展観の折、大津透氏とともに実物に接する機会を得たが、具体的な接合関係や釈文等については、近く公表を準備されている同氏の専論に譲り、ここでは簡単に文書の内容について紹介しておきたい。この文書断片は、北館厨の典である周建智が、儀鳳二（六七七）年十月十八日に西州都督府に宛てた牒文の部分と、都督府側での受理手続き（所管の官司において整理され連貼されている）を示す部分からなっている。周建智の名は、上記の内藤氏の論文において指摘されているように、橘文書・大谷1003, 1421, 2842, 1032号、中村文書B・C（内藤氏により付された記号）にも見えている。牒文は、北館厨において諸坊市で購入した刺柴と醬とが館客に供与されたことが記され、刺柴と醬の供出者の名とその数量が冒頭に逐一上げられ、その代価の支給を西州都督府に請求したものである。内容としては、橘文書・中村文書Cなどと全く同一のものである。敢えて題名を付すとすると、「唐儀鳳二（六七七）年十月西州都督府北館厨典周建智牒」とでもなろう。

現在既に裏打ちされ卷子に装丁されているので、背面は確認できないが、汚れも少なく、保存状態は良好である。牒文の文字も、他の周建智の牒文（橘文書・中村文書Cなど）と同筆らしく見える。これを敢えて贋作とするには、かなり明確な根拠を必要としよう。

ところで当文書の出处については、本文の左側に付されている姑臧の人段永恩による跋文²⁾の冒頭に、吐魯番の三堡（アスターナ）の出土文書であること、また晋卿（王樹枏の字）が所蔵するものと一連の文書であることが指摘されている。また同跋文によれば、王樹枏氏所蔵のものには、儀鳳二年の文字と「牒市司爲勘醬估報事」や「下柳中縣爲供客柴用門夫採供事」などの文言があると説明するが、王氏の『新疆訪古録』巻二に載せる吐魯番三堡出土の「唐儀鳳二年北館厨牒」（二紙）には、「此牒当係都督府厨所需柴醬諸物、下柳中縣採供者。都督府有録事參軍・録事史・市令諸官属。牒中府史即史、市司即市令也。所供物件皆具諸主姓名。云々」と解説が加えられている。おそらくは跋文に述べる王樹枏氏所蔵のものとは、『新疆訪古録』巻二に載せるこの「唐儀鳳二年北館厨牒」（二紙）のことを指していると思われる。さらに詳細は省くが、『新疆訪古録』の解説に「下柳中縣採供者」とあるのは、儀鳳二年十一月廿三日における參軍判倉曹の恒讓の判辞（大谷2842号）に従った処置であることは明らかである³⁾。恒讓の判案を載せる大谷2842号に接合する中村文書Eを見てみると、跋文に掲げられた「牒市司爲勘醬估報事」と「下柳中縣爲供客柴用門夫採供事」なる文言が、末尾の十行目と十一行目にこの文書の標目として見えている。しかも同文書には王氏の「唐儀鳳二年北館厨牒」（二紙）に見えるとされる「府史（正しくは倉曹の府である史蔵を指す）」や「市司」の文字が記されており、憶測の域は出ないが、『新疆訪古録』の「唐儀鳳二年北館厨牒」二紙のうち一紙は、中村文書Eに当たる可能性が高いものと考えられる。因みに北館厨の名は、同じく中村文書C（北館厨典周建智牒）に見えており、今回の「唐儀鳳二（六七七）年十月西州都督府北館厨典周建智牒」と一連の文書であることが容易に確認できるものである。

吐魯番出土文書は、当地の交通制度の解明に大きく寄与しているが、とりわけ北館文書群は、交通施設たる館の具体的な機能をうかがう上で貴重な史料となっている。この新たな文書断片の追加は、これまでの同文書群に対する理解に修正を加えるものではないが、確実に北館関係の一連の案巻の欠落を補うものである。改めて各地に散在するに至った、断片的な吐魯番文書の全面的な公開が待たれる次第である。

（完）

【註】

- 1) 本名は長尾甲。元治元（一八六四）年、讃岐高松藩士長尾柏太郎の長男として生まれる。東京高等師範学校教授兼文部省図書官となるが、明治三五（一九〇二）年官を辞し、のち上海に渡航する。中国の学者文人との交遊も深く、大正三（一九一四）年、帰国。京都に居住して、平安書

道会副会長等に就任する。昭和一七（一九四二）年、没（飯島春敬編『書道辞典』東京堂出版、一九七五年、五七二頁）。

今回の古典籍下見展観大入礼会には、この他にも同じく長尾雨山の箱書を有する数点の古写経や写本が併せて出売されている。『古典籍下見展観大入礼会目録』（目録、七一頁）によれば、内容は以下の如くである。

① 華嚴經 卷第八（隋開皇十七（五九七）年清信優婆夷敬造 卷末に願文四行有）

〔図版、三九頁〕

② 仏説天皇梵摩經 卷第五（唐長慶三（八二三）年令狐慈減敬造供養 彩色挿絵入）

〔図版、三六・三七頁〕

③ 唐人雜抄（唐文徳元（八八八）年写 二紙行書十七行 詩文の抜抄）

〔図版、四〇頁〕

④ 唐人書写草書經 殘卷（一紙は四十五行 紙背にウイグル文字の書写有。一紙は断片八行）〔図版、四三頁〕

2) 本文書の右側には、甲寅（一九一四年）五月の日付を有する順徳（府）の羅惇齋の題辭が付されている。残念ながら段永恩の跋文の年代を確定できるものは、一見した限りでは認められなかった。また本跋文には、王樹枏の他にさらに「素文先生」の名が見えている。素文を字号にもつものは多く、清代に限ってみても、司馬運錦（安徽省歙県の人）・童錦（江蘇省華亭県の人）・龍循（江蘇省江寧県の人）・袁機などが上げられるが、この人物の詳細については、今のところ不明である。

3) ただし『新疆訪古録』が「此牒当係都督府厨中所需柴醬諸物、下柳中県採供者。」と説明するのは正しくない。既に内藤氏が指摘するように（同氏、前掲『中国法制史考證』、三〇九頁）、北館厨が館客に供した刺柴と醬は、諸坊市等で購入したものであり、柳中県に下知して採供せしめたものではない。柳中県に下知したのは、客（北館の客ではない）に供する柴を門夫を用いて採供せしめるためであり、これは同県から通常戸税の柴を供客用の柴にあてていたが、給復のために現在戸税柴がないと上申ししてきたことに対して、都督府より下した指示である。

■ 紹介：許海生主編『新疆古代民族文化論集』（新疆大学出版社 1990年）

本書は、新疆大学歴史系が1988年7月から行なっている「新疆中亞民族文化講習班」の研究者の報告のなかから、七報告を選んで収録したものである。したがって収録されている七篇はいずれも新疆地区の歴史・考古に関するもので、執筆者も新疆の著名な研究者ばかりである。このような論集が新疆の出版社から発行されたことをともに慶びたいと思う。

このうち吐魯番関係では、総論的な侯燦「吐魯番歴史与吐魯番学」（同氏のものは「樓蘭考古文化研究」もある）をはじめ、その出土文物を用いた穆舜英「唐朝統治下的西域」（摘要は、『西北民族研究』1988年第1期）や蔣其祥「新疆古代錢幣的發現与研究」などがある。

出版の経緯からして、この三篇も含め、いずれも概説に近いのはやむをえないかもしれないが、蔣氏のものは、歴代の中国王朝の錢貨や西方からもたらされた錢貨とともに、新疆地区で独自に鑄造された錢貨についても手際よくまとめており、とりわけ初学者には有益である。（N）

事務局（連絡先） 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川 正 晴 方

TEL 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会 (The Research Society for Turfan Relics)